▼観光客にとって、市町村の境界は無関係

進む観光の「広域化」

本協議会のほかにも、近年は観光を広域化する動きが各地に見られています。

主なものは、「山形おきたま観光協議会（置賜地方3市5町）」「日本海きらきら羽越観光圏推進協議会（庄内地方2市3町および戸沢村、秋田県にかほ市、新潟県村上市・関川村・粟島村）」「めでためでた♪花のやまがた観光圏（村山地方7市7町）」などですが、これらはいずれも、県の総合支庁が事務局を担当。本協議会のように少数の自治体が独自に手を組むケースは、県内ではまだまだ珍しいようです。

広域観光という考えの原点にあるのは、「観光客にとって、市町村の境界は無関係」ということ。お客さまも1町だけで観光を楽しまなければならないというルールは当然ありません。旅行者のニーズが多様化する中においては、こうした考え方が特に重要で、これまで市町村ごとに「点」在していた観光地を「線」で結ぶことが大切です。

協議会は「三本の矢」

戦国時代の武将「毛利元就」は、3人の息子たちに「1本なら簡単に折ることができる矢でも、3本となるとなかなか折れない。このように3人が力を合わせることが大切だ」と説いたそうですが、現在の協議会の取り組みは、この教えそのものです。

本協議会設立の目的は「観光振興」、つまり、たくさんのお客さまに来ていただくことにありますが、3町に実際に住んでいる方々が、隣町に足を運び、その良さを理解することも大切です。3町の住民が隣町の魅力を互いに発信し合い、「矢」をさらに強いものにしていきましょう。

広域観光の促進に向けて　3町長のあいさつ

魅力的な観光地となる鍵は「磨き上げ」と「情報発信」

3町連携による広域観光推進事業は、2期（4年）目に入りました。

交流人口の増加や地域の活性化を図るうえで、今後も重要な役割を担う広域観光について、3町長からメッセージをお伝えします。

本協議会では、「最上川・五百川峡谷」をキーワードに、これまで観光面での可能性を探るシンポジウムや、3町の宝を巡る「まぼろしの左荒線街道ツアー」などを開催しました。

ツアーには、山形方面と仙台圏のお客さまを中心に3年間で700人を超える方々から参加いただき、多くの感想をいただきました。「おもてなしの心が感じられる」「地元の方がいきいきと輝いている」などの賛辞の一方、「情報発信次第では、もっといい観光地になれるはず」といった課題も聞かれました。

地域資源を観光につなげるときには決まったサイクルがあります。それは「掘り起こし」→「磨き上げ」→「情報発信」という流れです。各町のこれまでの取り組みにより、しっかりとした掘り起こしはできています。今後は、お客さまの立場に立った「磨き上げ」と「情報発信」が必要です。

3町が協力すれば、より魅力的な観光地を築くことができるはずです。

東日本大震災により、東北地方への観光客が激減し、地域経済への影響も出ていますが、元気のある所はもっと元気を出していくことが復興への第一歩です。2期目を迎えた本協議会では、町民の皆さんが自分の住む地域に誇りを持ち、その誇りをお客さまに自信を持って「おすそわけ」できるような観光地を目指し、事業を推進していきます。

白鷹町長　佐藤誠七
朝日町長　鈴木浩幸
大江町長　渡邉兵吾